

2) 調査結果

(1) 基盤環境

事業実施区域周辺海域においては、岸に沿ってリーフが発達し、その内側に種々のサンゴが帯状に分布してサンゴ礁を形成している。轟川河口南側の白保の海域には枝状コモンサンゴやユビエダハマサンゴを主とするサンゴ群集が分布するほか、アオサンゴの大群落もみられる。またサンゴ礁の岸側には、アマモ類で構成される海草藻場が帯状に分布しており、事業実施区域周辺海域の海域生物は、サンゴ礁、海草藻場が提供する多様な生息基盤を利用して生息している。

事業実施区域周辺海域において確認された海域生物を表-6.12.2(2)に示す。

表-6.12.2(2) 海域生物の確認状況

分類区分	確認状況
植物プランクトン	8目17科59種
動物プランクトン	12目22科67種
魚卵稚仔	魚卵：3目2科30種 稚仔：5目15科19種
底生動物	34目75科135種
潮間帯植物	13目23科52種
潮間帯動物	33目79科148種
魚類	13目64科445種
大型底生動物（目視）	24目59科141種
サンゴ類	3目16科127種
海藻草類	16目36科157種
葉上動物	15目20科33種
葉上付着微小藻類	6目12科39種
ウミガメ類	1目1科2種

注) 植物プランクトンから潮間帯生物までは平成13年度の調査結果を引用。
魚類、大型底生動物、サンゴ類、海藻草類、ウミガメ類の調査結果は平成13～15年度の調査結果を引用。
葉上動物・微小藻類は平成15年度の調査結果を引用。

事業実施区域周辺海域における生態系の概要を図-6.12.2(2)に、サンゴ類、海草類の分布を図-6.12.2(3)、図-6.12.2(4)に示す。

轟川が運ぶ河川由来の赤土を含む様々な物質による影響が考えられる轟川河口や、その北側の赤土が堆積しやすいと考えられる亀岩付近にかけては、海草類が被度10～30%程度でわずかに分布している程度であり、サンゴ類は分布していない。河川水の影響が直接的に及ぶ範囲では、栄養物質（窒素やリン等の有機物）の供給はあるものの、赤土等の様々な物質によってサンゴ類や海草類の光合成が阻害されるため、サンゴ類や海草類の生息・生育が困難であると考えられる。